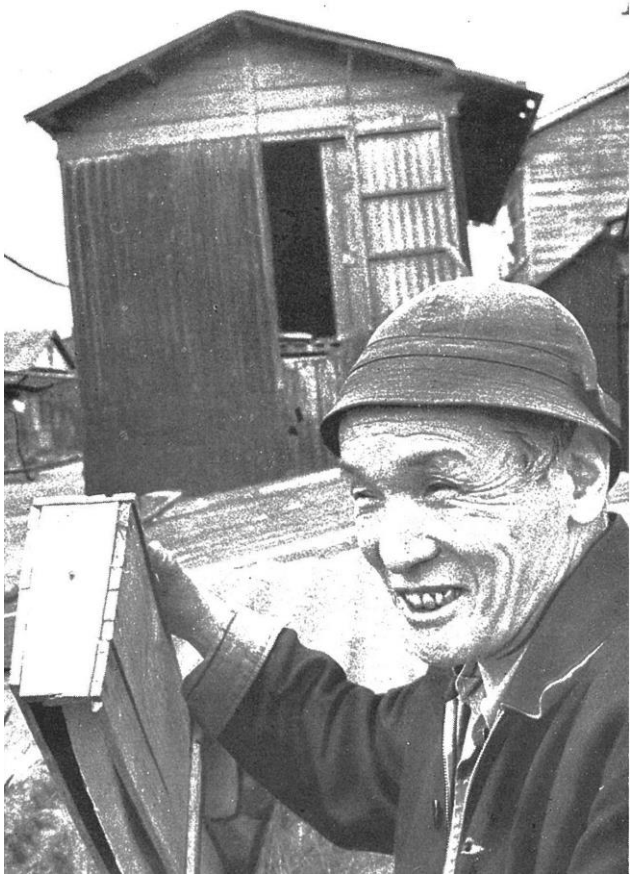


川崎長太郎の歩いた路（みち）

小田原文学館
没後30年
特別展

平成27年10月10日(土)～11月29日(日)

ごあいさつ

小田原の海沿いに生まれ育ち、東京へ出たものの郷土に舞い戻り、小田原に終生住み続けた小説家、川崎長太郎。「川長さん」と親しみを持って呼ばれていたその人が亡くなってから、今年で三十年を迎えます。

長太郎が書いていた「私小説」とは、作者の実体験を題材とした小説であり、大正から昭和初期にかけて全盛期を迎えました。自然主義文学の大家として知られる徳田秋声に師事した長太郎は、東京にいた時も、小田原に戻って物置小屋住まいだった時も、結婚してからも、「私に即して私を抜け出る」執筆スタイルで、主人公の名前を変えつつも、自分の体験から生まれた私小説を書き続けました

夜は物置小屋で原稿を書き、昼は小田原の郊外まで散歩する、在りし日の長太郎の姿を覚えている方々は、没後三十年となった今では、もう多くありません。

今回の小田原文学館特別展では、長太郎の作品はもとより、その日常の暮らしや世界観を形作ったものなど、より多面的な展示を企図し、長太郎と親交があった多摩美術大学教授 平出隆先生にご尽力を賜ることができました。同大学芸術人類学研究所の協賛により、資料展示の一部を構成していただき、さらに、建築家の青木淳氏及び大室佑介氏により、長太郎が暮らしていた物置小屋内部も再現しています。また、近代文学研究者の齋藤秀昭氏にも資料提供をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

この秋、自らの内面と対峙し続けた長太郎の作品などを通じ、人間の精神の発露としての文学の世界を感じていただければ幸いです。

平成二十七年十月　　小田原文学館

凡例

1. この小冊子は、２０１５（平成27）年10月10日（土）～11月29日（日）を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
2. 本冊子の編集及び執筆は小田原市立図書館学芸員 鳥居紗也子が行い、齋藤秀昭氏のご教示を賜りました。
3. 引用の際に新字体に改めた箇所があるとともに、ルビ、傍点、敬称等は適宜省略しました。
4. 資料の所蔵先の記載のないものは、小田原市立図書館の所蔵品です。
5. 今日の社会通念に照らして不適切と思われる表現がありますが、原文を尊重し、そのままとしました。
6. 展示内容と本冊子の掲載内容・資料番号等は異なる場合があります。

資料解説

第1章　詩人の目覚め――青少年時代

川崎長太郎は、明治34（１９０１）年11月26日、小田原に生まれました。15歳の時に神奈川県立小田原中学校（現・県立小田原高校）に入学し、文士となる希望を抱きます。

後に中学を中退した長太郎は、家業の魚商の仕事をしつつ、友人らと回覧雑誌を始めるなど文学への志を持ち続けていました。一方、小田原の民衆詩人、福田正夫から民主的な思想の洗礼や、詩人・評論家の加藤一夫からアナーキズムの影響を受けるなど、新たな思想にも出合います。

第1章では、文学を志した小田原の少年時代から、詩人としての活動を経て、大正12（１９２３）年に関東大震災に遭うまでの時期をご紹介します。

1．川崎長太郎生家写真（撮影年不明）

川崎長太郎は、小田原町万年３丁目（現小田原市浜町）に魚商の長男として生まれた。

2．小田原町地図　昭和13年

長太郎が通っていた新開地（小説中では「抹香町」）が掲載された地図。「整理して幾すじかの平行した小路を設け、妓楼が軒を連ねて造られた」（大南勝彦「小田原リポート」『私小説家 川崎長太郎』平成３年11月所収）様子がわかる。

3．校友会誌「相洋」　大正７（１９１８）年３月　小田原市立図書館「藪田義雄沙羅文庫」

小田原中学校友会の機関誌。当時一年生だった長太郎は「新年所感」という文章を執筆している。「土より学校へ、世の中へ、戦闘へ」、「勇ましく世の中の戦場で、命を的に美しい生存の競争者となるべき私である」、「勉強せよ、戦へよ」という言葉は、文学の道に進もうとしていた時期の志の表れともみることができる。

4．早稲田文学社編『文芸百科全書』隆文社　明治42（１９０９）年12月初版　個人蔵

長太郎は小田原中学在学時に、足柄下郡立図書館の所蔵資料の一部を破ったことが発覚し、中学を放校処分となる。その時に長太郎が破ったとされるのが、本資料と同じ『文芸百科全書』であった。長太郎が破ったのは中村星湖による「小説論」のページであった。

1

5．「民衆」創刊号　大正7（1918）年1月

小田原出身の詩人・福田正夫、井上康文らが創刊した雑誌。誌名は、アメリカの詩人ホイットマンの弟子であるトローベルの作品中の〝The People〟を訳したもの。長太郎は福田に、民主的な思想の洗礼を受けた。

6．川崎長太郎「小説『小犬』」（「民衆」16号　大正10年1月）

「民衆」16号に発表された長太郎の小説。「私」は、近所の野良犬が子どもたちにいじめられているのを見て最初は楽しむが、やがていじめをやめさせる。「玩具」を奪われた子どもにすまないと思いつつ、犬に餌を与え喜んで食べる様を見て満足するが、次第に犬の境遇が哀れになりその場を去るという話。同号巻末の「同人消息」の長太郎の欄には、「短篇を二つ書き上げた。いつも元気で勉強もしてゐるし働てもゐる」と記されている。

7．川崎長太郎「灰色の空を眺めて」
（「赤と黒」第2輯　大正12年2月）　復刻版（戦旗復刻版刊行会）
川崎千代子氏蔵

「赤と黒」は大正12年から13年にかけて発行された詩雑誌。萩原恭次郎、壺井繁治、岡本潤、川崎長太郎の4人によって創刊され、後に林政雄、小野十三郎が同人として加入した。作家・有島武郎の経済的援助によって創刊され、通常号4冊と号外1冊の全5冊が出された。

8．「赤と黒」第3輯　大正12（1923）年4月　復刻版（戦旗復刻版刊行会）
川崎千代子氏蔵

表紙裏に「詩一つづつ」、挟み込まれた謹呈箋の裏に「やればテロのみ―加藤の自由人運動、大杉一パの運動と共産側もトウあれど後日の地下運動なし」と長太郎自身によるとみられる書き込みがある。

9．川崎長太郎「無題」（詩）（「赤と黒」第4輯　大正12年5月）
復刻版（戦旗復刻版刊行会）　川崎千代子氏蔵

10．川崎長太郎「『赤と黒』回想」原稿　昭和54（1979）年

「文藝」昭和54年10月号に掲載された、長太郎の自伝的エッセイの原稿。福田正夫との出会いや関東大地震被災など、詩雑誌「赤と黒」発行前後のことが回想されている。

11．川崎長太郎「『赤と黒』回想―自伝風に―」
（「文藝」18巻9号　昭和54年10月）

このエッセイ掲載後、少し間をおいて、「早稲田の下宿時代」、「『文芸復興』期前」と続けて「文藝」に掲載されたエッセイは、いずれも「歩いた路」という副題がつけられている。

12．「シムーン」創刊号表紙　大正11（1922）年4月　複製

嘆きの歌

空は黒く濁りつめ、
星一つさえ光らない夜、
見よ。
暗い沖の彼方に、
波の穂がしらかすかに白らむ沖に、
ひそ〳〵と波間に沈み、
又寂しくゆらめき出づるあさり火を。
それは悲しい灯であるけれども、
私は思ふ。
はたらきに酔ふ漁師等が、
自然のさゝやかながらも、
なつかしいいとしいその饗宴に、
心から捧げる感謝のともしびである事を。
おゝほのか乍らも感激にもえる沖の灯よ。
海洋の自由にほゝゑむともしびの心よ。
私は遠いあかりを眺め、
海に住む人々の生活にあこがれては、
海にはぐゝまれた昔を偲び、
偲んではいのちのふるさとより、
遠くさすらひ行く我が運命の悲しさを思ふのだ。

（「民衆」復活号
大正9年9月）

アナーキズム（無政府主義）系の文芸雑誌。全５冊刊行され、創刊号のみ「シムーン」、２号以降は「熱風」と改題された。全冊の表紙に「ブルジョア文芸の撲滅」と記されている。

13・川崎長太郎「智識ブルジョアの福士氏に与ふ」
（「シムーン」創刊号　大正11年４月）　複製

「シムーン」創刊号に掲載された、長太郎の評論。福士氏とは、青森県出身の詩人・福士幸次郎のことで、雑誌「人間」大正11年２月号に掲載された福士の「文学評論」に対して書かれたもの。

14・加藤一夫「人間性文学の否定」
（「シムーン」創刊号　大正11年４月）　複製

「シムーン」創刊号に発表された、加藤一夫の評論。

15・「新興文学」創刊号　大正11（１９２２）年11月
復刻版（日本近代文学館）

「新興文学」は、大正11年11月から12年８月まで全９冊が発行された、プロレタリア系の文芸雑誌。発行部数は毎号二千～三千部、原稿料は１枚につき平均１円が支払われたという。当時、プロレタリア文学雑誌が大部数発行の商業誌として出されたことは、進歩派の作家や評論家たちに大きな勇気を与えたという。

16・川崎長太郎「プロレタリアートと宗教文学」
（「新興文学」１巻２号　大正11年12月）　復刻版（日本近代文学館）

「ブルジョア」にとっての宗教を、飢えの恐怖のないところから生まれたものとし、彼らの文学を「お慰み文学」として退ける一方、自分を含めた「プロレタリアート」の宗教は「革命」であり、「吾等の宗教文学とは革命の為めの文学に外ならない」と位置づけている。当時隆盛を誇っていたプロレタリア文学運動の影響を強く感じさせる評論。

17・川崎長太郎「葛西善蔵氏の芸術を否定す」
（「新興文学」２巻５号　大正12年５月）　個人蔵

「子をつれて」などで知られる私小説家、葛西善蔵について、「葛西氏の芸術を喜ぶは、要するに貧乏生活に嫌悪を抱かない階級の人だ」、「葛西氏の芸術を、貧乏小説を我々は、我々の貧乏生活を呪ふやうに、極端に嫌悪する」などと述べ批判している。現在、私小説家の中でも同系列に位置づけられることが多い葛西を批判しているのは注目される。

18・川崎長太郎著、平出隆・齋藤秀昭編『姫の水の記』
Tokyo Publishing House　平成26（２０１４）年３月

「無題」

北川は自分にぶつかって来る様子を、それがカフェの女給の手管だとはどうしても思えなかった。事実手管ならば、チップを置いた事のない、五度に一度友達と一緒に酒など飲んだ揚句置いても高々五十銭位のものだ――その自分を目掛けて来る筈がない。又自分が文学書生で貧乏な事はふうつきでも一目に知れる事だし、「ゆたか」には友人の渡里や小山も出入して居るのだから、その方からでも彼女に自分の境遇が知れる筈だとこう北川はお明の好意がさもしい打算からではないと打ち消すのであった。

（「新小説」
大正14年２月）
一部抜粋

「川崎長太郎の著作物に未収録のエッセイのうち、第二次世界大戦時までに執筆され、〈場所〉が一つのテーマと見なせるものを集成した」（「凡例」より）作品集で、平成26年に出版された。「滅びた小田原より」、「魚屋三代記」、「小田原葺」など、小田原がテーマとなっているものも多く収録されている。

19・川崎長太郎「滅びた小田原より」（「太陽」29巻12号　大正12年10月）　個人蔵

関東大震災で甚大な被害を出した小田原の様子を伝えたエッセイ。途中に行間がかなり開いている箇所があるのは、雑誌掲載時に削除された部分を空白としてそのまま残したもの。削除部分では、震災直後の混乱した状況について記したと考えられる。

第2章　私小説家としての出発

小田原の実家が関東大震災で倒壊した長太郎は、上京し、文士訪問記執筆の仕事をもらうようになります。大正13（1924）年には、仕事をとおして知った徳田秋声のもとへ原稿を持参したり、初めて宇野浩二と出会ったりするなど、作家としての路を歩み始めます。

当時の長太郎は、小田原と東京を行き来する生活を送っていましたが、昭和13（1938）年に永住の覚悟で小田原に引き揚げ、トタンでできた実家の物置小屋に住み始めます。

第2章では、私小説家として活躍しはじめた時期から、徴用を経て終戦を迎えるまでを、「私小説家」といわれる他の作家との影響関係などもふまえてご紹介します。

20・川崎長太郎「無題」（「新小説」30巻2号　大正14年2月）　個人蔵

長太郎の文壇デビュー作。「新小説」に掲載されると、宇野浩二から称賛されるなど好評を得た。原稿料は当時の金額で30円で、その安さに納得できない長太郎は菊池寛に交渉するが、「世間の相場ではないけれど始めてのものだから」と言われ「面目を失い引き下った」。長太郎は昭和52年に菊池寛賞を受賞しているが、この出来事以来一度も菊池には会わなかったという。

21・川崎長太郎「閑日」（「原始」1巻10号　大正14年10月）　複製

雑誌「原始」に掲載された長太郎の短編小説。「夏中を小田原で暑さをしのぐ為め、又実家の商売の手伝ひをする為めに」帰郷した「私」が、関東大震災後のバラックの立ち並ぶ「小さな町」で「単調と退屈」をもてあます様子が描かれている。「原始」は加藤一夫の個人雑誌として創刊され、のちに文芸雑誌とな

「滅びた小田原より」

太陽が何気なく出る。起き上る。母は焼け跡から赤くなつた釜を持つて来て、その中に少しばかりの米を入れ、その中に水を沢山入れカユを造り、それを一つしかない茶碗に入れて交る〴〵飲んだ。父は腰が抜けたやうに、そこに寝そべつて居る。半生の苦難の形見を寸時にして灰としたのであるから無理もない。街を歩きに出かけた。一夜にして人間の顔が変つて仕舞つた。半死人のやうだ。その人達が影法師のやうに行きかふ間を、戸板にのせられた病人が行く。ビール箱に詰められた屍体がかつがれて行く。涙が至る所に流されて居る。〔中略〕大きな家が焼け土と変つて居るのは妙な気持であつた。昨日まで人力車ばかり乗り廻して地面の上を歩いた事のない金持が悄然として尻を端し折つて行くうしろ姿も気になつた。『貧乏人も大尽もなくなつて仕舞つたんでさ。大昔にかへつたんですよ。これからは実力でさ。私ら見たやうな腕一本脛一本の人間は、今度で漸くのび〴〵したですよ。』

（「太陽」大正12年10月）

一部抜粋

った。

22・川崎長太郎『路草』　文座書林　昭和９（１９３４）年２月

長太郎初の小説集として、昭和９年に文座書林文学全書のうちの１冊として８５０部限定で出版された。

23・『路草』出版記念会」写真　昭和９（１９３４）年

『路草』出版を記念し、小田原で開かれた出版記念会の様子を写したもの。福田正夫や牧雅雄の姿がみえる。

24・川崎長太郎　小説「徳田秋声」（「新潮」51巻10号　昭和29年10月）

長太郎は、大正12年から行っていた文士訪問記を通して知り合った徳田秋声に師事していた。この小説は、妻の死後、女性作家の山田順子との恋愛と別れを経験した頃の秋声をモデルにしているとみられ、「川崎」と女性との交渉なども描かれている。

25・「あらくれ会の集り」写真　昭和10（１９３５）年1月19日

日本近代文学館蔵

徳田秋声の代表作「あらくれ」にちなんで名づけられた会の様子。

26・川崎長太郎『裸木』　砂子屋書房　昭和14（１９３９）年8月

長太郎の３番目の小説集。初版は一千二百部発行された。文壇デビュー作「無題」などが収録されている。表題作は、小田原の宮小路を舞台に、映画監督の小津安二郎がモデルとされる人物が登場する〝小津もの〟の代表作。

27・川崎長太郎「宮小路」（「月刊小田原わが街」　昭和50年9月）

タイトルの「宮小路」とは小田原にある地区の呼び名で、関東大震災で被害を受けるまで、料亭、待合、飲食店、芸者屋などが並ぶ花柳街であった。松原神社の膝下にあることからこの名がつけられたとされる。震災後は、映画館、レコード屋、食堂などさまざまな店が軒を連ねたという。

28・幾山河「豆評論　歴史小説の流行」（「信濃毎日新聞」　昭和13年1月19日）

国立国会図書館蔵　複製

長太郎は戦前、「天地人」、「幾山河」の筆名で新聞に文芸時評記事を掲載し、生活費を得ていた。この文章では、今の時代はありのままに世間のことを書くことが難しいので、自由な創造をもって創作できる歴史小説が流行していると述べている。戦時下の言論統制への批判を読みとることができる。

29・天地人「旋回塔　文学の骨を入れる」（「信濃毎日新聞」昭和15年10月28日）

国立国会図書館蔵　複製

匿名で行っていた文芸時評記事の一つ。最近の文学は、商業主義に偏りすぎ

「余熱」

「いいえ、小説家だから偉いなんて言ったって駄目だ。私には通りやしない。三十五にもなって、弟の厄介になっていて、何が偉いもんか。私が達者な体なら、お前なんかそんな意久地なしは殺してしまうよ。」

「助からないなあ――」

「兄弟は他人の始まりだって言う通り、正だって何時までお前がただめしを喰って居て御覧、きっとお前を邪魔ものにするに定っている。他人の末はなおの事だよ。私一人で沢山だ。私がどうなったっていいよ。

お前は私の目に這入らない所へ行っておくれ。喰べて行く事が出来なかったら、頸をくくるかなんかして死んでしまっておくれ。お前は生きてるより死んでしまった方が私にはいいよ。」

（「早稲田文学」
昭和10年10月）
一部抜粋

てしまい、原稿料稼ぎ以外に大した意味がないものが増えてしまっていることを危惧し、文学統制が「骨のなくなつた文学に骨を与へる」ようになることを期待している。

30・天地人「手榴弾 青年の面目」（「信濃毎日新聞」 昭和18年2月25日）
国立国会図書館蔵 複製

匿名の文芸時評。未熟・未経験からなる青年の眼の美しさを称える一方、「私欲に汲々として自らの殻を頑固に守らうとする」眼の濁った「中年者」を批判し、そのような者は青年に席を譲るべきだと主張している。

31・川崎長太郎島本恒宛はがき「入院先から」

父島で足を負傷した長太郎は、終戦後、横須賀の海軍病院に入院した。このはがきは、入院先の病院から旧知の島本恒に宛てて出されたもの。

32・川崎長太郎「しらみ懺悔」（「新生」2巻3号 昭和21年3月号）
復刻版（日本近代文学館） 川崎千代子氏蔵

「新生」は、終戦直後にいち早く創刊した総合雑誌で、戦後の大家の復活に大きな役割を果たした。「しらみ懺悔」は戦時下を舞台に、「荷物運搬夫」として徴用された「川瀬」と仲間が、虱に悩まされる様子を描いている。

33・川崎長太郎「徴用一年半」（「早稲田文学」13巻2号 昭和21年3月）
個人蔵

「荷物運搬夫」として徴用された体験をモチーフにした短編小説で、父島時代につくったとみられる短歌が多く含まれている。長太郎は徴用先で『万葉集』を愛読したという。

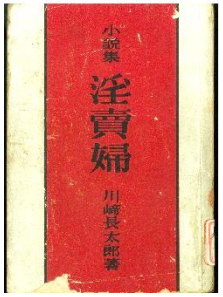
34・川崎長太郎『淫賣婦』岡本書店 昭和23（1948）年4月

長太郎の5番目の小説集。「徴用行」、「しらみ懺悔」、「父島」などが収録されている。小田原市立図書館所蔵本には「蠟燭」にボールペンによる多数の書き込みがあるが、長太郎自身によるものとみられる。

35・川崎長太郎「しほざゐ集」原稿 昭和23（1948）年

「西サガミの文化雑誌」を出す準備をしていた播摩晃一のために、依頼原稿の代りとして長太郎が贈呈した本資料には、俳句15句が記されている。

36・川崎長太郎「女優」原稿 昭和25（1950）年



34

第3章　抹香町ブームと物置小屋

戦後の長太郎は、徴用時の経験をもとに「父島」を発表します。その後、「別冊文藝春秋」に「抹香町」を発表、さらに小説集『抹香町』を出版し、小田原の路地裏に生きる人々を描いた作品群、いわゆる〝抹香町もの〟が人気を博し、一大ブームとなります。

また、ＮＨＫラジオ「朝の訪問」への出演、雑誌へ特集記事の掲載など、メディアへの露出も増え、川崎長太郎の名が世間へ広く知られることとなります。

第３章では、物置小屋での執筆活動や、〝抹香町もの〟と呼ばれることとなる作品など同時期の創作をご紹介します。

37・川崎長太郎「抹香町」（「別冊　文藝春秋」　昭和25年3月春の小説集）

長太郎の名が広く知られるきっかけとなった小説「抹香町」が初めて掲載された雑誌。抹香町は主人公の「川上竹六」が折に触れて通っている街の名で、そこでの女性との交渉が描かれている。

38・川崎長太郎『抹香町』大日本雄弁会講談社　昭和29（１９５４）年1月

表題作「抹香町」や「鳳仙花」などの〝抹香町もの〟に加え、「軍用人足」といった〝徴用もの〟などが収録された7番目の小説集。帯文は舟橋聖一による。この講談社版のほか、収録作を入れ替えて〝抹香町もの〟だけを収めた新書版も出された。これらは「異常な反響」（保昌正夫）を呼び、〝抹香町もの〟は一種のブームとなった。

39・川崎長太郎「川崎長太郎　抹香町へ」（「月刊小田原わが街」昭和51年3月）

40・川崎長太郎『伊豆の街道』
大日本雄弁会講談社　昭和29（１９５４）年3月

昭和29年に講談社から出された8番目の小説集。夫の書いた小説を持って作家「竹七」の住む物置小屋を訪ねてきた「花枝」は、夫との不仲を打ち明け竹七に好意を寄せる様子をみせる。竹七は花枝を旅行に誘い、二人は伊豆へ出かけるが、それぞれ年齢や子どものことを気にかけ思い悩む。

41・川崎長太郎『『群像』編集部　早川徳治宛書簡』
昭和28（１９５３）年12月9日

「伊豆の街道」シリーズの最終編を編集者へ送った際の書簡。

42・「抹香町・伊豆の街道の会　芳名簿」　昭和29（１９５４）年

「抹香町」

外を歩くだけでは、締めつけるような、退屈、寂寞、空虚がこぐらかった、切ない胸苦しさの始末がつかない、ある日のことであった。

「抹香町」へでも行ったら、多少気が変るかも知れないと、酒を絶っている竹六は本当に久しぶり、その方角を目ざした。九月なかばの、どんより曇った、風のない、いやに蒸し蒸しする午後五時頃であった。

昔、田圃であった一廓には、トタン屋根の平屋ばかり、三四十軒ごみごみ並んで居り、一間道路や、三尺路地には、ちらほら、ひやかし客など歩いていた。家々の入り口や、門のように柱のたったあたり、うちわもった女達が、しゃがんだり、立ったりして、蓮っぱな声を散らしていた。終戦前と、さして変っていない、横文字の小さな看板を、申し訳のようにくっつけているだけが目新しいような店先きを、竹六はむさぼるような、遠慮のない目つきでみて行った。

（「別冊文藝春秋」
昭和25年3月）
一部抜粋

昭和29年3月16日、『抹香町』、『伊豆の街道』の出版記念会が開催された。これは、長太郎と親交のあった宇野浩二、渋川驍らの呼びかけによって東京駅の東京ステーションホテルを会場として行われたもので、中山義秀と渋川が司会を担当、久保田万太郎、尾崎一雄、白洲正子らが挨拶をした。

43・川崎長太郎『やもめ貴族』宝文館　昭和31（1956）年12月

川崎千代子氏蔵

長太郎の初めての随筆集。表紙には、物置小屋内で執筆する長太郎の写真が使用されている。

44・川崎長太郎「浮草」原稿　昭和31（1956）年

「小屋住いの川上竹七」と抹香町で働く「節子」の交渉を描いた小説。長太郎には同名の単行本があるが、この原稿の小説は収録されていない。

45・「川崎長太郎ブーム―ある私小説家の私生活」

（「週刊サンケイ」3巻26号　昭和29年6月）

折からの〝抹香町ブーム〟、〝川崎長太郎ブーム〟を受けて掲載された長太郎の特集記事。冒頭には「小田原の名物男になった長さん」とのキャプション付きで小屋と長太郎の写真が掲載されている。この記事により、物置小屋で執筆する作家としての長太郎がさらに広く認知されることとなった。

46・日本現代文学全集84『上林暁　外村繁　川崎長太郎集』

講談社　昭和40（1965）年

講談社の「日本現代文学全集」シリーズの第84巻には、長太郎と上林暁、外村繁の作品が収録された。上林、外村ともに長太郎と親交があった作家であり、長太郎も二人と同じ集になることを歓迎した。

47・川崎長太郎『群像』編集部　早川徳治宛書簡

昭和35（1960）年6月14日

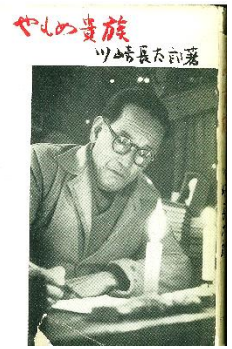
講談社「日本現代文学全集」シリーズ刊行について述べたもの。

48・川崎長太郎「流浪」原稿　昭和57（1982）年

〝抹香町もの〟であるが、抹香町を訪れる男性ではなく、そこで働く女性の視点から書かれた小説。語り手の女性は借金を返済し、馴染みの客「中川」に見送られて抹香町を出て行くが、「ものの丸みつき」も経たないうちに抹香町へ戻る。久しぶりに女性の部屋に上がった中川に「一緒になる気はないか」と言われるが、叶わないまま二人は別れる。

49・川崎長太郎「宮小路の芸者」原稿　昭和32（1957）年

本郷の貸し間に住み、時々同人雑誌や文芸雑誌に「小説」を発表しつつ、通信社の社外原稿を書いて生活している「助七」と、小田原の宮小路で「不見転



43

49

芸者」として働く女性との交渉を描く。13番目の小説集『晩花』に収録されている。

50・川崎長太郎「自筆年譜　大正14～昭和39年」年不詳

長太郎自身による年譜。

51・川崎長太郎「人間の宿命」原稿　昭和16（1941）年

小田原市立図書館青蛙荘文庫

小田原市立図書館の館長であった石井富之助が所蔵していた原稿。「人間といふものは、大なり小なり因果な星の下に置かれてゐるやうに思はれる」と、人間の「因果」や「宿命」について述べた評論。

52・川崎長太郎「彼」原稿　昭和37（1962）年

短編小説。数え年六十二歳で私小説家の「K」の生活ぶりや、彼のよく通う「大通りにある食堂」や「柱を朱に塗った支那料理屋」、国府津にある「海と向きあった国道筋の食堂」といった料理店のほか、普段の散歩コースが詳細に紹介されている。

53・川崎長太郎「忍び草」原稿　昭和44（1969）年

短編小説。中山義秀との関わりを中心とした文学者たちとの交流をテーマに描いている。中山のほか、宇野浩二、田畑修一郎ら作家たちを実名で登場させ、事実に即す体裁をとっている。

54・川崎長太郎「地下水」原稿　昭和56（1981）年

55・川崎長太郎「鴎」原稿　昭和57（1982）年

56・川崎長太郎「甥」原稿　昭和58（1983）年

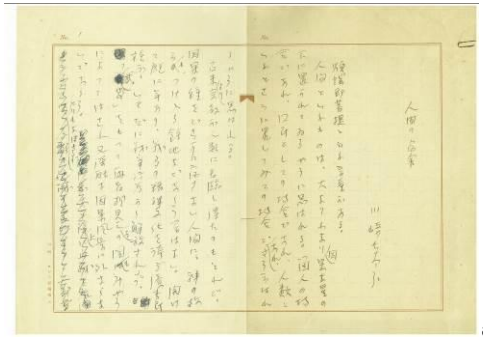
短編小説。絵が好きな息子を芸術大学に通わせたい、と弟から打ち明けられた「私」は、甥（弟の息子）と、作家になるまで苦労した自分の経験を重ねあわせ、慎重な助言をする。定時制高校へ入学した甥は、家業の魚商を手伝いつつ市の展覧会へ絵を出品するなどしていたが、零細会社の取締役となった四十五歳のある日、「六十になったらアトリエをたてるんだ」と「私」に告げる。

57・川崎長太郎「鳥打帽」原稿　昭和58（1983）年

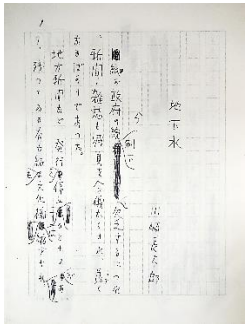
物置小屋の様子が原稿用紙数枚に渡って描かれている。

58・物置小屋模型1／10　平成27（2015）年

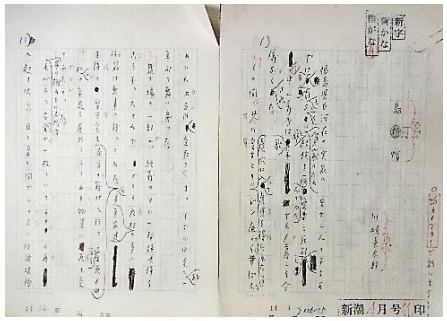
大室佑介アトリエ蔵



51



54



57

第4章　結婚、中里の家――歩いた路

昭和37（1962）年、長太郎は結婚し小田原市中里に転居。昭和42（1967）年には軽い脳出血で倒れて右半身不随となりますが、以後も執筆活動を続け、作品集『忍び草』、『乾いた河』などを発表。第25回菊池寛賞受賞、小田原市文化功労者として表彰されるなど、その活動が評価されます。

昭和58（1983）年3月、地元小田原出身の作家で交遊も深かった尾崎一雄が急逝すると、そのショックから体調を崩して入退院を繰り返すようになります。同年7月には脳梗塞で倒れ、以後亡くなるまで闘病生活を送ります。そして昭和60（1985）年11月6日、肺炎のため入院先の病院で亡くなります。

第4章では、結婚から没後にいたるまで、地元での顕彰の動きなどをふくめてご紹介します。

59・川崎長太郎「やもめ爺と三十後家の結婚」原稿　昭和37（1962）年

六十歳の「K」と、「先のみえた年寄りと、貧乏世帯はって、共々燻って行きたがる酔狂な三十後家など、三千世界を探しても、滅多に出遭う訳はない」という三十ほど歳の離れたP子の「一緒になる相談」が紆余曲折を経てまとまっていく様子を描く。はじめ「やもめ爺と三十後家の結婚」という題名であったが、後に「結婚」と改題された。原稿の書入れによると、「ある結婚譚」という題名も候補にあったことがわかる。

60・川崎長太郎「船頭小路」原稿　昭和39（1964）年

長太郎の生家に近い、小田原の「千度小路」を舞台にした小説。「私の生れた、小田原・船頭小路（旧藩政時代からの町名）は、大正時分までその名の如く、漁師街であった」という書き出しで始まっている。

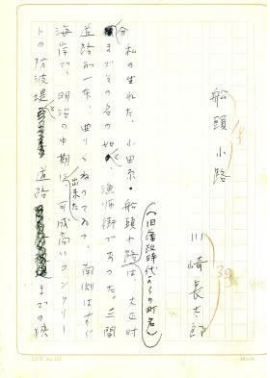
61・川崎長太郎「海浜病院にて」原稿　昭和43（1968）年3月

昭和42年、長太郎は軽い脳出血で倒れ、小田原市酒匂の林病院に入院しているが、その時の経験をもとに書かれたとされる短編小説。弟と妻の「P子」に支えられて「海浜のH病院」に入院した「私」が、次第に回復し歩行の練習に励むさまや、束髪風の「老付添婦」、同じ病室になった「六尺近い大男」や「長身の青年」らとの交流を経て退院するまでを描く。以後右半身不随となった長太郎は、利き手とは逆の左手で執筆するようになり、筆跡も変化している。

62・川崎長太郎「川崎長太郎遺言書」　昭和45（1970）年

川崎千代子氏蔵

自分の死後、すべてを千代子夫人に譲ると記した長太郎自筆の遺言書。



「やもめ爺と三十後家の結婚」

普通の女共がハナもひっかけなくなっているような老残者に、殊更の執心示すP子には、又P子なりの註文・夢もあって然るべく、文学少女の娘時代を過ごした彼女では、書くことも種切れとなり、壁に突き当って、空しく立往生しているかのようなKが、もう一度息吹き返した如く立ち直り、ひと花もふた花も咲かせてほしい、という願望があるらしかった。名声の上でも、物質的にも、パッと花咲いた存在、つまり俗に言って立身出世が、Kに賭けられた彼女唯一の悲願で、彼がいつ死のうと、早晩いやでも二度目の後家となるわが身の末がどうなろうと、そんな先ざきのことなど、凡そ眼中にないみたいな模様であった。で、彼女が、話をその一点に絞って、相手の顔色を読むに、Kも大体彼女の望みに叶うような様子であった。

（「群像」昭和37年9月）　一部抜粋

63・山本健吉「日本文芸家協会名誉会員推挙決定通知」
昭和56（1981）年5月18日
川崎千代子氏蔵

長太郎を日本文芸家協会名誉会員へ推挙することが決定したことを知らせる通知文。

64・川崎長太郎『川崎長太郎自選全集』全5巻
河出書房新社　昭和55（1980）年4月

この全集の刊行により、長太郎は芸術選奨文部大臣賞を受賞した。

65・川崎長太郎『歩いた路』　河出書房新社　昭和56（1981）年2月

随筆集。昭和54年から55年にかけて「文藝」に連載された「歩いた路」の他、「神奈川新聞」に月に一度掲載された「一隅より」や、「東京新聞」や雑誌「群像」その他に掲載されたものをまとめた「折おりの記」が収録されている。

66・川崎長太郎・尾崎一雄「私小説のながれ」校正刷　年不詳
川崎千代子氏蔵

長太郎による校正の跡がみられる。「海」昭和55年1月号に掲載された。

67・川崎長太郎「戦後―歩いた路」原稿　年不詳

「歩いた路」の最終回。終戦後に小田原に戻ってから、抹香町ブーム、物置小屋からの転居、結婚を経て、死にゆく友人たちを見送り、自らの死についても考えることが増えた近年の様子などが綴られている。

68・川崎長太郎「春きたる　海辺のみちで　とりのまね」色紙
昭和39（1964）年9月16日

長太郎の俳句。早川の真福寺にある碑にはこの句が刻まれている。

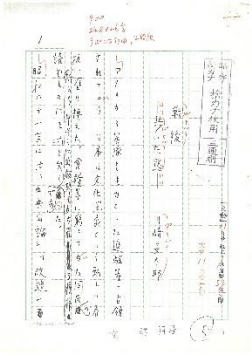
69・川崎長太郎「海の町で　雪となりけり　ほほかむり」色紙　年不詳
川崎千代子氏蔵

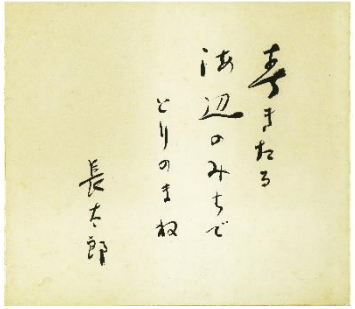
70・川崎長太郎「気がつけば　葉の一枚もなし　杏の木」色紙　年不詳
川崎千代子氏蔵

71・芸術選奨文部大臣賞　賞状　昭和56（1981）年3月
川崎千代子氏蔵

72・川崎長太郎「尾崎君逝く」原稿　昭和58（1983）年

尾崎一雄は、長太郎と同じ小田原出身の作家で、以前より親交が深かった。この文章は、尾崎が亡くなった少し後に書かれた追悼文。長太郎は尾崎の急逝に大変なショックを受けたという。


67



68

73．川崎長太郎「尾崎君逝く」（「新潮」80巻7号　昭和58年6月）

74．川崎長太郎「死に近く」原稿　昭和58（1983）年
1980（昭和55）年4月

入院先の病院で書き上げた、長太郎の最後の創作。「八十一歳になる」「私」は、作家や批評家の仲間が次々と他界する中で、自分を「生き残り」と表現し、「あとへ遺される家内の身の上」を強く心配している。本原稿には長太郎が編集者へ送る際に同封したと思われる通信文が添えてあるが、そこには「短いものですがよろしく　後日長いものやらせて頂きませう」とある。最期まで執筆意欲を持ち続けていたことがわかるが、叶わぬ願いとなった。

75．川崎長太郎「死に近く」（「海」15巻9号　昭和58年9月）

76．葬儀の様子を伝える記事　「朝日新聞」昭和60（1985）年11月13日

弔辞を読む水上勉の写真が掲載されている。

77．野口冨士男「弔辞」原稿　昭和60（1985）年

長太郎の葬儀で読まれた弔辞の原稿。

78．水上勉「訃辞」原稿　昭和60（1985）年　複製　川崎千代子氏蔵

79．川崎千代子・兵藤正之助・井上和男・松信桑輔「小田原を生きた私小説作家川崎長太郎」（「有鄰」第293号　平成4年4月）　川崎千代子氏蔵

長太郎の文学碑建立を記念し行われた座談会の様子を伝えている。

80．「川崎長太郎自筆作品目録　大正14～昭和58年」　年不詳

81．つげ義春『夢の散歩・つげ義春新作集』
北冬書房　昭和50（1975）年6月　川崎千代子氏蔵

長太郎の所蔵本。「けどね宇野浩二や川崎長太郎になじめないのはまだ若いんだね」というセリフがあるページに付箋が挟み込まれているが、長太郎自身によるものとみられる。該当ページは「義男の青春」という作品で、「駄菓子にひとしい漫画」を描いている「津部義男」が、旅館で働く女性と親しくなるが、困窮から借金を申し込んだため振られて実家を出たものの、下宿代を払えず一畳の部屋に八年間も閉じ込められるという話。

82．川崎長太郎「老眼鏡」（遺品）　川崎千代子氏蔵

83・川崎長太郎「傘・ステッキ」（遺品）

84・川崎長太郎「ベレー帽」（遺品）

85・石井富之助「川崎長太郎と図書館」原稿　平成３（１９９１）年２月

長太郎の没後に出版された『私小説家　川崎長太郎』のために書かれた、元小田原市立図書館長の石井富之助の原稿。長太郎は戦前、通信社の匿名時評の執筆のため、図書館によく通っていた。そこで、「館長代理」の石井と「長時間だべ」っていたという。

86・『私小説家　川崎長太郎』

川崎長太郎文学碑を建てる会　平成３（１９９１）年11月

長太郎の没後、「川崎長太郎文学碑を建てる会」が結成された。本資料は、碑の建立記念誌として刊行された。

87・第12回小田原文学館特別展リーフレット　平成17（２００５）年10月

没後二十年の節目に、小田原文学館で開催された特別展「私小説家　川崎長太郎　二十年目の追悼」のリーフレット。

86

謝辞

本展開催ならびに本冊子制作にあたり、次の個人・機関の方々より御協力を賜りました。

御芳名を記し、心より御礼申し上げます（五十音順、敬称略）。

川崎　千代子　　公益財団法人　日本近代文学館

川崎　浩子　　国立国会図書館

田中　美代子

小田原文学館

没後30年特別展　川崎長太郎の歩いた路

主催　小田原市立図書館

協賛　多摩美術大学芸術人類学研究所

協力　平出隆・青木淳・齋藤秀昭・大室佑介

印刷　平成27年10月

発行　小田原市立図書館

※無断転載を禁じます。

参考資料

近代小説の流れ

作家名はおもな時期の傾向を示しています。
（異なる傾向の作品も書いている場合があります）

江戸時代後期

読本・戯作など
古典・漢文からの影響や通俗的な色合いが強い

明治前期

政治小説・翻訳小説など

西洋小説の手法を導入

擬古典主義
尾崎紅葉
幸田露伴
樋口一葉
伝統的な古典を模範とする

明治中期

写実主義
坪内逍遥
心理描写を主眼としてありのままの写実を主張

浪漫主義
北村透谷
島崎藤村
泉鏡花
国木田独歩
伝統に対して個人の独自性と主観を支持

明治後期

自然主義
島崎藤村
田山花袋
徳田秋声
国木田独歩
真実を科学的・客観的に観察して題材とする
虚構と技巧を否定

反自然主義
自然主義に属さない作家たちの総称
夏目漱石
森鷗外

大正〜昭和初期

私小説
葛西善蔵
宇野浩二
牧野信一
川崎長太郎
作者が直接に経験したことを題材とする

心境小説
尾崎一雄
梶井基次郎

白樺派
武者小路実篤
志賀直哉
学習院出身者が中心
理想主義・人道主義的

プロレタリア文学
小林多喜二
中野重治
共産主義を支持する政治的文学

新思潮派
芥川龍之介
菊池寛

耽美派
永井荷風
谷崎潤一郎
佐藤春夫

芸術派
横光利一
川端康成
井伏鱒二
プロレタリア文学を支持しない作家たちの総称

資料翻刻

1．翻刻にあたり、常用漢字等に改めた箇所がある。
2．行替等は原資料に拠った。
3．一行あきはページ区切りを示す。

人間の宿命

川崎長太郎

煩悩即菩提と云ふ言葉がある。

人間といふものは、大なり小なり因果な星の下に置かれてゐるやうに思はれる。個人の場合であれ、国民としての場合であれ、人類といふところに置いてみての場合であれ、さう云はれるやうに思はれる。

古来より宗教が人類に君臨し得たのもそれで、因果の種をどこかに宿さない人間に、神の救ひもつけ入る余地などあらう筈はない。開けて既に年あり、幾多の精神文化を誇る優秀氏族が、いまだに戦争行為から解放されず、「武器」をもつて両者相見えるの図もみやうによつてはこれ又深酷（ママ）な因果風景に外ならないであらう。

個人として、俺は幸運児だ、幸福者だと得意満面に嘯（うそぶ）いてゐる者ありとすれば、さういい気に嘯く性根そのものがが（ママ）みるとからすれば第一因果に出来上つてゐると云へやうものであらう。うぬぼれと何んとかを持ち合はせない人間はなしとされてゐるやうに、どこかに（ママ）因果の陰を抱いてゐない者は、三千世界に先づなかりさうである。私はじめ随分と吾身の因果を噛みしめその日その日を送つてゐるのだが、自分の手の届く狭い周囲の人々を見渡しても多かれ少かれ因果の種を宿してゐるやうである。

人間の宿命は因果なものだと思へる。仏教もそれ故にこそ、煩悩即菩提と云ひ、因果なる身であればこそ、菩提の境が希はしく、戦争と平和は人類永遠の相剋であらう。因果な星の下に生きて、どう救はれ、成仏したものか。誰だつて一皮むけば因果な宿命に置かれてゐるとして、その救ひを求うる工夫精進は人さまざまであり、その手順（じゅん）の違ひにさしづめその人の個性といふやうなものが現はれのぞかれるのであらう。私は今まで、人間の因果な方面ばかりに気を向けて、とど大袈裟へ云へば絶望を感じ、自分や人間に対して見きりをつけたがるやうな気分で生きがちであつたが、この頃幾分なりとも、因果な檻の中にゐて且つ自由に息づかひをしたい、人間の人間らしい営みと云ふものに心が向ひ、心がひらけかけて来たやうに覚える。とは云へ、まだまだその方の目鼻がついたと考へられない。ともすれば、因果地獄の泥沼にひきずりこまれ勝ちで、カラリと晴れた秋空のやうな爽快味は、今のところ私の顔のどこにもさしてゐないやうである。

月読みの月の出待ちて帰りませ
山路は栗のイガの多きに

良寛の歌だが、人間もここまでのぼり詰め、円光をその頭上に載つければしめたものだが、中々に凡夫生身のわれわれでは、その世界においそれと手の届かう筈もない。我利、我執、己の五慾に即き、それにこづき廻されたり、ひとや世間の嘘やいい加減さ等々に腹をたてたりして、蛇ではないが地面の上にはどうにかうごめき得ても、「われ月と共にあり」といふやうな超脱振りは随分むづかしいやうである。その人が人間離れし、自然がその人にのりうつた（ママ）やうによつて、始めて良寛のやうな人なのであらうが、又おのづからに天衣無縫の歌も為せるのであらうが、平生は勝手なことをして居なが（ママ）、時たま気がついたやうな顔になり、良寛もどきの唄を作つても、人間はそれでごまかせるかも知れないが、お天道様は顔をそむけるであらう。

先日明石海人の短歌集を読んでみた。癩といふ因果な死病にとりつかれた人間の唄であ

る。因果が自分の目にも人にも見やすい肉体の方に現はれる方が、己にもはたにも気がつきにくい精神や何かの方に出てゐる場合よりか、これ又人間らしい因果な話であるが、他人は勿論当人にも切実であるのは当り前として、海人の唄もはじめの方には、業病につかまれ、これを呪ふ心がさんざんであつた。ところが段々と病苦にも馴れ、諦めも出来て来て、しまひの方の唄になると、個体を離れて心は自然天界につらなるといふやうな発展を示して居り、これは大した心を示唆し得た唄であつた。そのやうに心ひらけると共にその肉体は日に日につひえ、身は一雫の露のやうに消えて白骨と化すのであつた。とまれ因果極まる業病に処して、病ひが肉体を蝕んで行くにつれ、本人の心は肉体的のものから個体的のものから解き放たれるあとを示してゐる。海人の唄にみる救ひは救ひと云ふに余りに切なく悲痛なものであらうが、若い身空で吾が肉体を根（ね）こそぎむしりとられ死して行く人間に宿つた菩提の心が始めから安直である筈はない。

一六、九、九

（52．川崎長太郎「人間の宿命」原稿　昭和16（1941）年

小田原市立図書館　青蛙荘文庫）

川崎長太郎略年譜（1）

＊ゴシックは小田原関係事項

年号／年齢	できごと	文学史事項	世の中のできごと
明治34　0	11月、神奈川県足柄下郡小田原町万年（現小田原市浜町）に、旅館相手の魚商の父太三郎と母ユキの長男として生まれる。	与謝野晶子「みだれ髪」	神奈川県立小田原中学校開校（明33） 日露戦争（明37～38）
明治41　7	第一尋常高等小田原小学校（現三の丸小学校）入学。		
明治45（大正元）　11	弟正次誕生。この年学習意欲が出て成績向上。		中華民国成立（大元）
大正3　13	クラス二位の成績で尋常科卒業、高等科進学。	夏目漱石「こころ」	第一次世界大戦開始
大正5　15	高等科を卒業。土木技師になるべく朝鮮へ渡るが脚気になり帰郷。	夏目漱石没 **森鷗外「高瀬舟」**	足柄下郡立図書館開館
大正6　16	中学入学のため新聞配達を行う。4月、県立小田原中学校（現県立小田原高校）入学。文学に魅了され友人と回覧雑誌発行、文士を目指す。	民衆芸術論起こる **萩原朔太郎「月に吠える」**	
大正7　17	足柄下郡立図書館の本を毀損し放校処分となる。家業を継ぐべく毎日魚を担ぎ箱根へ通う。	新しき村運動 「民衆」創刊	
大正9　19	加藤一夫訪問。雑誌「民衆」に詩「嘆きの歌」他掲載。自作が初めて一般誌で活字化される。		米騒動起こる ベルサイユ講和条約（大8）
大正10　20	詩集『民情』刊。北原武夫と詩誌「夕暮」を出すが一号で休刊。加藤一夫から無政府主義（アナーキズム）の影響を受けビラ貼り等を行い、一晩拘留される。	労働文学・労働文学論が隆盛 **志賀直哉「暗夜行路」** 小田原事件	国際連盟発足（大9）
大正11　21	秋、加藤に従い上京。同氏宅で起居し、断続的東京生活を開始。徴兵検査を受け第二乙種合格。	森鷗外没	ソビエト連邦成立
大正12　22	有島武郎の支援で雑誌「赤と黒」創刊。帰郷していた際関東大震災で実家が倒壊し上京。	童話・童謡流行 「文藝春秋」創刊	関東大震災
大正13　23	文筆稼業の傍ら私小説を書き、文士訪問で面識を得た徳田秋声のもとで「無題」を朗読、菊池寛に紹介される。	**井伏鱒二「山椒魚」** **谷崎潤一郎「痴人の愛」** **宮本百合子「伸子」**	普通選挙法公布
大正14　24	雑誌「新小説」に文壇デビュー作「無題」掲載。宇野浩二から称賛され好評を得る。宇野の紹介で牧野信一・田畑修一郎を知る。	**宮澤賢治「春と修羅」** 私小説をめぐる論争起こる **梶井基次郎「檸檬（れもん）」**	ラジオ放送開始
大正15（昭和元）　25	この年、尾崎一雄と知り合う。	円本時代始まる	
昭和4　28	新聞文芸社に就職。一時、東京で「路草」のモデルといわれる女性と生活を共にする。	**川端康成「伊豆の踊り子」** **島崎藤村「夜明け前」**	世界恐慌始まる
昭和5　29	新聞文芸社を解雇。女性と別れ小田原へ帰る。実家の物置小屋で寝起きし、秋に上京。	**小林多喜二「蟹工船」** **横光利一「機械」**	エロ・グロ・ナンセンス大流行
昭和6　30	一時、女性ダンサーと小田原で生活。	**牧野信一「ゼーロン」**	満州事変
昭和8　32	父・太三郎が死去。弟が家業を継ぐこととなる。	**尾崎一雄「暢気眼鏡」**	小田原町図書館開館
昭和9　33	武田麟太郎の斡旋で小説集『路草』出版。尾崎一雄、北原武夫らが出版記念会開催。	**室生犀星「あにいもうと」** **中原中也「山羊の歌」**	
昭和11　35	「余熱」その他の作品により第二回芥川賞候補となるが落選。牧野信一が死去し、葬儀に参列。	古典回帰の気運起こる **堀辰雄「風立ちぬ」**	二・二六事件（昭11）
昭和12　36	短編集『朽花』刊。	国民文学論争起こる **永井荷風「濹東綺譚」**	日中戦争開始

川崎長太郎略年譜（2）

＊ゴシックは小田原関係事項

年号／年齢	できごと	文学史事項	世の中のできごと
昭和13 37	永住の覚悟で小田原へ帰り、実家の物置小屋に住む。ほぼ毎日小田原町図書館に通う。	**火野葦平「麦と兵隊」**	国家総動員法公布
昭和14 38	小説集『裸木』刊。		小田原市誕生（昭15）
昭和17 41	日本文学報国会設立、会員となる。	**北原白秋没／中島敦「山月記」**	アジア・太平洋戦争開始（昭16）
昭和18 42	徳田秋声を訪問、病床を見舞う。	**谷崎潤一郎「細雪」**	
昭和19 43	秋声死去、日本文学報国会小説部会葬に参列。母ユキ死去。海軍運輸部工員として徴用され荷物運搬を行う。	「中央公論」「改造」休刊	
昭和20 44	運搬夫として父島に派遣されるが、作業中に物を落とし右足を痛める。終戦後、入院生活を経て12月に小田原の物置小屋に戻る。	新日本文学会結成 小田原文化会結成	原爆投下（昭20） 終戦
昭和24 48	台風で物置小屋側面のトタンが数枚飛ぶ。	**川端康成「山の音」**	国際連合発足 湯川秀樹ノーベル賞
昭和25 49	「別冊文藝春秋」に「抹香町」発表。		朝鮮戦争勃発
昭和26 50	加藤一夫死去、葬儀参列。小田原競輪場に通う。	「チャタレイ裁判」開始	電力再編
昭和27 51	福田正夫の納骨式と「偲ぶ会」に出席。	**野間宏「真空地帯」** **吉行淳之介「驟雨」**	日米行政協定調印
昭和29 53	小説集『抹香町』刊。「別冊文藝春秋」で特集記事。小説集『伊豆の街道』刊。NHKラジオ「朝の訪問」出演。『抹香町』・『伊豆の街道』出版記念会開催。「週刊サンケイ」で特集記事。	**三島由紀夫「潮騒」**	第五福竜丸被災 この頃、町村合併で市域拡大
昭和31 55	随筆集『やもめ貴族』刊。	**三島由紀夫「金閣寺」**	国際連合加盟（昭31）
昭和32 56	小説集『浮草』刊。		売春防止法施行
昭和33 57	台風で物置小屋のトタン屋根が半分近く飛び、空き家になっていた母屋へ移る。	「三田文学」創刊 **大江健三郎「飼育」**	市立図書館城内へ移転
昭和34 58	弟正次が小田原市議会議員になる。	高浜虚子没	安保条約改定反対運動 ソ連宇宙船地球一周
昭和35 59	晩秋、中山義秀と、病床の宇野浩二を見舞う。	**水上勉「雁の寺」**	キューバ危機
昭和36 60	宇野浩二死去、通夜と葬儀に参列。	**北杜夫「楡家の人びと」**	東海道新幹線開通（昭39）
昭和37 61	東千代子と結婚。小田原市中里の旅館の別館に間借りして住む。	**安部公房「砂の女」**	第三次中東戦争（昭42）
昭和42 66	軽い脳出血で入院。右半身不随となるが、リハビリにより杖なしで歩行可能になる。	**大江健三郎「万延元年のフットボール」**	東名高速道路開通（昭44）
昭和44 68	秋、敷地内の独立した平屋建てに転居。	**三島由紀夫「豊饒の海」**	米大統領ニクソン訪中
昭和46 70	5月頃、物置小屋が取り壊される。	川端康成没	
昭和47 71	作品集『忍び草』刊。		
昭和52 76	菊池寛賞を受賞。	小田原文話会結成	自動車生産台数世界1位（昭55）
昭和53 77	第27回神奈川文化賞を受賞。	**田中康夫「なんとなく、クリスタル」**	
昭和55 79	3月から『川崎長太郎自選全集』全五巻刊行。尾崎一雄と対談「私小説のながれ」。		東京ディズニーランド開園
昭和56 80	芸術選奨文部大臣賞を受賞。		科学万博開催（昭60）
昭和58 82	尾崎一雄急逝、ショックで体調悪化。脳梗塞で入院。		日航機墜落事故
昭和60 83	11月6日、肺炎のため入院先の小田原市立病院で死去。無量寺で葬儀・告別式が行われた。	**山田詠美「ベッドタイムアイズ」**	